

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 ご利用者：90代 女性

利用期間：令和5年7月よりしおん入所

病名：腰殿部打撲傷、腰部脊柱管狭窄症、高血圧症、誤嚥性肺炎、深部静脈血栓症

経過 ：令和5年5月に自宅にて転倒し体動困難となり救急搬送される。

明かな骨折はなく、腰殿部打撲との診断にて鎮痛とリハビリ目的で入院となる。

入院中、発熱と食欲低下にて内科併診し尿路感染症と両下肢深部静脈血栓症が認められた。右上肢の脱力も見られ、頭部の画像診断を行うも脳出血や急性期梗塞は確認されず一過性脳虚血性発作疑いとして経過観察となった。

全身状態はほぼ安定されたが筋力低下等にてリハビリに時間を要するとの事から令和5年7月にしおんに入所される。

内 容

入所当初は移乗・一部介助、移動・全介助。排泄・終日オムツ使用で尿、便意ともに曖昧。また『お尻が痛い』『腰が痛い』と話され食事以外はほぼベッド上で過ごし、離床時間も短くレクリエーションへの参加も拒否されており、意欲低下も見られていた。

入所から半月程経ち、施設生活にも慣れたためか、少しずつ自分の思いを話して頂けるようになり、「自分で出来る事はしたい。職員さんと呼ぶ事が申し訳ない。

昔は和裁をして家計を支えていた。旦那と息子が船員だったから、一度航海に出ると長期間帰って来なくて、とても寂しい思いをした。寂しくないよう地域のコミュニティに参加していた。」などを話して下さり、ご利用者の思いを確認する事と同時に意欲向上が見られた。

まずは担当リハと協力し、移乗・移動の自立を目指し取組みを開始。職員の見守りもなく自立で行えるようになった。取組み中から自分1人で出来る喜びからか、徐々に他ご利用者との交流と笑顔が増えた。次に離床時間アップの取組みを摸索していると、お孫さんから編み物を編んでほしいと編み物セットが届く。右腕の可動域が狭く、痛みもあり、『出来ない』と消極的な発言が度々聞かれていたが、お孫さんからの定期的な連絡や職員の声掛けで1日数分の作業を行うようになった。少しずつ編んで形になってきた事で『ゆっくりならできるね』『孫に頼まれたからねー』と、やる気になっている様子が伺えた。自室で休息を取りながら取組みを続け『完成した』と笑顔で報告してくださり、その後もアクリルたわしや鍋敷きの作成を行い、ユニット職員や担当リハ職員へ1つずつプレゼントしてくれるまでになった。身体の痛み

も軽減され、離床時間も増えフロアで過ごす事も多くなって馴染みのご利用者もでき、その方に『俺の分も作ってくれ』と依頼されたと話し、作成して笑顔でプレゼントしている姿も見られた。自分が作った物をプレゼント出来た喜び、他ご利用者が喜んでくれた喜びや自分1人で出来る事が増えた事で意欲向上に繋がり、現在のADLは入浴形態もアップし排泄もオムツから日中トイレ自立となった。

これまで寂しさを埋める事を理由にし、他ご利用者と交流を図っていたのかもしれないが、本来は他者との交流を好み、みんなに喜んでもらう事を自身の喜びとし、楽しく自分らしく生活したいとの思いが強くあるのだと感じた。今後も自分らしさを1つでも多く取戻し、楽しく、キラキラした笑顔で安心した生活を送れるよう支援していきたい。